

生活科に求められる授業力

——第2学年の実践事例から——

Teaching Skills and Abilities Required for a Living Environment Studies

(Seikatsuka) Class

崎野 温代 佃 繁
SAKINO Atsuyo TSUKUDA Shigeru

はじめに

(1) 生活科のねらい

生活科は平成元年（1989年）に改訂、平成4年（1992年）に施行された学習指導要領により小学校第1学年及び2学年に新教科として設置された。当初、改訂により社会科、理科が廃されたため、この2教科を統合したものと捉えられる時期があったが、4半世紀を経て、小学校入門期における主要教科として位置付けられている。

物語の世界に入り込み、登場する動物と自分を一体化して読み進めたり、対象を自然現象なのか、社会現象なのかを識別して考えたり、自己中心的で自分のやりたいことに没頭し、周囲に目が向きにくい傾向を持つこの時期の未分化な子どもにとって、特に体系化した内容を持たず、学校がある地域の社会や自然環境の特徴、児童の実態等に応じて、カリキュラムを独自に立案し、体験的な学習を中心に、総合的横断的に展開できる教科としての意義を持つ。

生活科のねらいは、現行の学習指導要領に「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心をもち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。」とある。また、①学習上の自立 ②生活上の自立 ③精神的な自立の3つの意味での自立としている。端的に示すと「自立した生活者となるための基礎を確立すること」と考える。

新設以降確保されたてきた週3時間の授業を、各校の特性をいかに把握し、どのように構成し、具体的にどう展開することで、この究極の大きなねらいを達成していくのか、学校に託された責任は重い。

学習指導要領解説生活科編の「第4章指導計画の作成と内容の取扱い 2内容の取扱いについての配慮事項」には、「児童の側に立ち、児童の思いや願いに沿った必然性のある学習活動を展開することが重要になる。」と示され、また、「第5章指導計画の作成と学習指導 第3節単元計画の作成」においても、「児童の思いや願いの実現に沿った必然性のある学習活動で構成する。」と記されており、さらには単元の構想を具体化する上で配慮することとして、「それぞれの段階で必然性のある指導計画とすることが大切である。」と繰り返し、『必然性』という言葉が表記されている。

子どもが好奇心を沸き立たせ、自ら探究心を持って学び続けていく生活科を支えるものは、いかに子どもが目の前の課題を『必然』と思い込み、自分事として解決をめざし、学びに挑もうとするかということであり、授業者は、児童の実態はもとより、子どもたちの生活基盤となる保護者や地域の願いや要望を踏まえて、明確なねらいをもち、学習課題を設定し、学習展開していくかというカリキュラムデザインする力を持っているかに係っている。

つまり、生活科は、指導者の『授業力』を最も必要とする教科であると言っても過言ではない。一つの授業実践から生活科における授業力を検証してみる。

(2) 生活科における授業力とは

～授業実践事例 第2学年「ぐんぐん いきいき われらがカメさん」から考える～

まず本単元の位置づけについて述べておきたい。

生活科には、3つの階層に9つの内容が示されている。

- 児童の生活圏としての環境に関する内容（①学校と生活 ②家庭と生活 ③地域と生活）
- 自らの生活を豊かにしていくために低学年の時期に体験させておきたい活動に関する内容（④公共物や公共施設の利用 ⑤季節の変化と生活 ⑥自然や物を使った遊び ⑦動植物の飼育・栽培 ⑧生活や出来事の交流）
- 自分自身の生活や成長に関する内容（⑨自分の成長）

本実践は、「⑦動物を飼ったり、植物を育てたりすることを通して、それらが育つ場所、変化や成長の様子に関心を持ち、また、それらは生命をもっていることや成長していることに気づき、生き物への親しみを持ち、大切にすることができる能力や態度の育成を目指す」内容のうち、生き物の飼育に取り組んだものである。

小学校では飼育活動が盛んに行われる。飼育小屋が整備され、ウサギやアヒル、ヒヨコやニワトリ、水生生物や昆虫など多様な動物が飼われ、学校として、また学級独自で、当番活動として子どもたちは餌をやったり、小屋を掃除したりと日常的に小動物とふれあい、継続的に育てることを行う。

成長の過程を喜び、時に新しい命の誕生に感動し、反対に死に直面して涙することは、生命の尊厳について身をもって直面できる機会を持つことは大きな意義があり、強いては自らの生命を大切に、他者の存在をも尊重し、共生する力を養うことに通じる。

ところが、昨今の鳥インフルエンザの発生や他のウィルスへの感染の恐れ、また子どもたちのアレルギーの問題などにより、年々飼育活動は縮小している現実がある。ただ、可愛いから育てようという安易な構えでは済まない課題も生じている。

しかしながら、子どもたちは元来、動物を好み、大きな関心を示す。町の公園の草むらや川や池で、昆虫やアメリカザリガニなどの水生生物を見つけては、その飼育をしたいと願う。家の庭でダンゴムシを見つけたと虫かごに入れて大切に持ってきたり、通称アカハラ（ニホンイモリ）という両生類を追ってずぶずぶと池に入り込み、ずぶ濡れになったり、内緒で自分のズボンのポケットに忍ばせて持ち歩いていたり好奇心のままに行動に移す姿も多い。

今回の実践も、春の校外学習で訪れた琵琶湖岸の公園で見つけた3センチにも満たないミドリガメとの出会いに始まった。

1. 授業力①～想定外に対応できる基盤を築く～

学校現場では、往々にして予期しない状況が起きる。そうならないよう、事前の下見や準備には万全を期すのであるが、それでも想定外なことが起こりうる。

その日、雨上がりの公園で、水辺から上がってきた多くのミドリカメの大軍に出くわしたのである。事前の下見では、これほどの数のカメの確認ができなかった担任にとって想定外の状況である。小さく、愛らしいカメの群れに一目で魅了された子どもたちは、いつもなら真っ先に向かう公園の遊具もそっこのけで、我先にとカメを捕獲し始め、あっという間に何十匹というカメが集まった。子どもたちは、口々に「可愛い。」「みんなで飼いたい。」と興奮気味である。すでに、「これは僕のだ！」と手から話さない子もいる。

「現地に置いて帰るべきか。」子どもの熱意を受け止め、「学校に持ち帰るのか。」担任の判断に猶予はない。そのような時に大きな支えとなるのが、自らの経営への支援体制づくりである。

学校生活のほぼ全てが、学級担任に委ねられることが多い小学校であるが、担任が自らの学級経営を支える基盤づくりに力を入れているかどうかで方向性は大きく変わる。その基盤の一つに、自らの学級経営方針を明らかに示し、他の教職員との連携と保護者への啓発ある。校長の示す学校経営方針の下、学級担任としてどのような学級づくりを目指すのかについて学級経営案としてまとめ、管理職はじめ、他の教職員に対し、また家庭に向けて折あるごとに発信しておくことである。とりわけ、低学年においては、家庭の支援が不可欠であり、家庭生活とのかかわりが深い生活科においては家庭の理解と協力は大きい。つまりは、担任一人の裁量に留まらず、このところよく言われる『チーム学校』として子どもの指導に当たる体制づくりである。



熱中する子どもを前に、担任はこう切り出した。「学校で飼えるか、飼えないかは、君たち次第だ。」

と。そして、今だけの軽い気持ちでは生き物を飼うことはできないこと、さらには、教室にカメを飼うための準備がないことなどを話して聞かせ、さらに、同行していた先輩教員に生き物を育てることの責任の重さや大変さについて補足を依頼した。まさに阿吽の呼吸での連携である。

結果、学校に戻ったら、

- ・学級で力を合わせて、みんなで考え、みんなで育てること
- ・決して途中で投げ出さないこと
- ・校長先生に自分たちの決意を告げること

を確認し、6匹のミドリガメを持ち帰ることとなった。

校外学習翌日の通信には、次のようなコメントがある。

だれかのカメじゃない！みんなのカメなんだ！責任を持って育てると約束します！

〇〇先生から、とても大切なお話をいただいた2の1。大切な生き物・・・可愛いけれど、育てるのはとても大変なのだ。1週間や2週間もすると、遊びたい気持ちに負けて、面倒を見ない仲間が出てくるようじゃ、任せられない。・・・それに対して、少し考えて「そだてます！」との2の1の答え。決めたからにはやりぬく。きっと帰ってから、カメの育て方を調べたいというお子様もいらっしゃったことでしょう。何か協力していただければいいなとありましたら、ぜひお力をお貸しください。カメを見つけた子どもたちは、公園の遊具で遊ぶのも忘れ、「カメの保育園」を作ったり、カメの名前を考えたりと興味津々でした。

(学級通信16号 2015. 5. 20より抜粋)

機を逃さず、保護者と情報を共有することも、授業をスムーズに進めるための一助である。自己満足に終わらず、ある程度の反対や批判をも覚悟で、これからの授業の方向性を明らかにしておくことが望ましい。

2. 授業力②～授業のグランドデザインを構成する～

現時点で、子どもたちの願いは「カメを飼いたい。」という単純な思いつきである。教師はその単なる「思いつき」から確固たる「思い込み」に高め、学習価値を持たせるための授業構想をねらなければならない。

そのためには、本単元を通して、身に付けさせたい力を明確に持ち、現在の子どもの実態と、単元終了時点での子どもの姿を想定した上での単元構想(授業のグランドデザイン)づくりが必要である。ここを曖昧にすると、子どもの衝動的で短期的な欲求に振り回され、「活動あって中身無し」の結果に終わってしまう。しかも、生命に関わる生き物の飼育という長期にわたるであろう学習については、明確かつ細心の計画とゴールの子どもの姿を想定しておくことを抜かしてはならない。

今回、飼育に取り組む背景には、本学区が、約30年前に京阪神のベッドタウンとして、山林を切り開き開発された新興住宅地であり、樹木が歩道に美しく植えられ、自然を残した公園も点在するなど比較的自然環境が残されているというものの、虫や水生生物つかみを経験した子どもが少なく、また学校でも継続して飼育している動物がいなかった点と、1年生から進級したばかりで、自分中心の思考が大方を占め、学級や小グループなどの集団意識が低いことから、常に『◎なかまを大切にすること◎学校のやくそく、クラスのやくそくを守ること◎「29人全員」で考えること、楽しむこと』という学級経営の方針を、懇談会や家庭訪問などでは口頭で、学級通信、連絡ノート等では活字で細やかに、子どもにも保護者にも示していたこともある。

つまり、カメの飼育活動を通して、内容項目「⑦動植物の飼育・栽培」とともに、「⑨自分の成長」を組み込んで学習を進めるという見通しを持つと、授業構想の核となる明確な目標が見えてくる。これこそ授業力を支える大きなポイントである。(別紙1参照)

(1) 単元のねらい

継続的なカメの飼育を通して、それらに生命があること、成長に伴う変化に気づき、仲間とともに世話をすることを通して、仲間のよさや自分自身の成長に気づくことができる。

(2) 本単元で育てたい自立の基礎

○学習上の自立・・・カメの成長や変化の様子、育てていく中で気づいた発見や思いを、絵や文で表した

- り、伝えたりすることができる。自ら進んで世話をを行うことで思考を深めることができる。
- 生活上の自立…生き物とかかわりを深め、飼育活動に必要な技能を身に付けることができる。手洗いなど衛生面に気をつけ、自らの健康を守る態度を身に付ける。
 - 精神的な自立…生き物を育てる上での苦労や喜びを実感し、継続して生き物を育てることができる自分自身の成長に気づく。その自信を次の活動に生かそうとする。

(3) 授業展開上の3視点

- しっかりとしたねらいをもつ

「もっとカメにとって〇〇な住処をつくりたい」「もっと〇〇してあげたい」という自分なりの願いを持ち、その願いを実現するために様々な方法を追求し、工夫しようという動きを導き、常に仲間と考えを交流し、学び合う場を設け、実行につなげる学習展開を繰り返すことで、自分で判断し決定する力、仲間と協調して取り組む態度、課題解決に姿勢を育てる。



向かう

- ゆったりとした場を与える

各小グループで1匹のカメを飼育することで、飼育する対象とかかわりを深める。1年間という長いスパンでの飼育活動を想定した上での、カメの飼育スペースを常設し、日常的に世話をしたり、観察したりできるよう配慮する。カメが苦手な子どもについては無理をせず、自分にできることを見つけ、行えるよう配慮する。

- きっちりとらえ、育てる教師の役割

当初の「飼いたい」という単純な願いを、責任を持って「飼いつける」という覚悟にまで高められるよう、様々な課題に面するたびに意見交流の場を持ち、「自分にもできそうだ」という自信から、「自分がやらなければいけない」という責任感、「協力してやり通そう」という協同性を高める学習展開を行う。

導入当初は授業の流れを一定化し、どの児童も見通しを持って学習に参加でき、誰もが安心して意見が出せるよう受容的な聴き方を徹底する。

(4) 単元全体に関わる評価規準

(生活への関心・意欲・態度)

- ・飼育している動物に親しみを持ち、大切に育てようという気持ちをもって繰り返し関わろうとしている。自分の役割を責任を持って果たそうと努めている。
(活動や体験についての思考・表現)
- ・飼育している動物に適した環境、動物の特徴や編やに気づき、それを絵や文で表したり、進んで交流したりしようとしている。
(身近な環境や自分についての気づき)
- ・飼育している動物が生命を持ち、自分たちと同じように成長していることに気づくとともに、継続的に飼育活動ができる自分自身の成長に気づくことができる。

3. 授業力③～課題解決に向けた聞きあい、話し合う場づくり～

カメを飼うためには、解決しなくてはならない課題が次々と生じてくる。子どもたちにとっては、何としても乗り越えねばならないハードルである。言い換えると「必然の課題」であり、代表的なものが次のようなものであった。

- (ア) カメを育てるための環境づくりや餌の準備
- (イ) 誰がいつ世話をするのか、役割分担
- (ウ) 自分の健康を守るための方法
- (エ) 夏休みのカメの世話
- (オ) 冬越しの方法

飼育活動は、軌道に乗れば授業時間として確保しなくとも、子どもの主体的・自発的な常時活動となる。しかし、そこに行きつくまで、また状況に応じた共通理解の時間を持ち、子どもたちにとって

『自分たちが決めたこと』として自覚することが長く活動を持続する原動力となる。

生活科の学習は、活動に重きが置かれがちで、授業研究会でも大方は物作りの場面や週末の成果発表会の場を公開されることが多い。子どもは生来遊びの天才であり、やること が分かれば没頭し、熱中して活動に取り組む。しかし、その活動の価値を探っていくと、動き出す段階に行きつくまでの教師の指導の差が歴然と表れる。

はりきってカメを連れ帰った子どもたちだが、大半は連れ帰ったことで満足し、次の見通しが持てないことが多い。ましてや2年生に進級したばかりの段階では、すでに関心 が移り、他にしたいことができてきたり、面倒くさくなったりするのも当然である。そこをどう関心を逸らさず、活動へのエネルギーを持続するかは、課題解決のための話し合いによるところが大きい。

実際、こんな一大事が発生した。

ある保護者から、ミドリガメの持つウィルスへの懸念の声があがり、飼育を中止してほしいという申し出があったのである。飼育上の配慮事項について、事前に把握しその対処法は検討していたものの、子どもの健康面へ指摘とあり、学校としても管理職や養護教諭を交えての協議にも至った結果、様々な文献や医療関係者の見解を得て、十分な手洗いやうがい の励行で対処し、飼育の継続も可とすることとなったが、指示を下すのではなく、飼いつづけるのかどうかについて子どもたち自身の話し合いの時間が持たれた。すると、子どもたちから、自分自身の健康への配慮とともに、「カメも病気にしてはいけない」という意見が出され、全員一致で水替えや餌やりなどの前後に手洗いと消毒、うがいを徹底することがルールとなり、みんなで注意し合おうということになったのである。カメを介して、「言われてするのではなく、どうすることがよりよいのか。」にまで考えを巡らそうとする姿が見られた。まさしく子どもの生活面での自立の一端と言えよう。こうした子どもの成長の兆しはすぐさま広く保護者に伝えられ、カメの飼育に関して一層の理解は深まるきっかけともなった。

また、夏休みが近づくと、40日もの長い間、カメをどうするかが大きな問題となった。子どもたち誰もが酷暑の教室にこのまま置いてはおけないと声を揃え、解決法を話し合った。「先生に頼めばいい。」「自分たちのカメなのに無責任だ。」「誰から家で飼えないだろうか。」「子どもたちの表情は様々である。「絶対に自分が持って帰って世話をする。」「持って帰りたいけれど家の人はどういうだろうか。」「・・・最終、立候補した子どもが、家族に相談し、了解が得られた子が分けて世話をすることとなり、結果、2人の子どもが3匹ずつ40日間預かることとなった。しかし、話し合いはそこで終わらない。万が一、40日の間に命を亡くすことになったら・・・子どもたちは予想できることならについて繰り返し話し合いを行った上で、2人の子どもに託すこととなった。



そして2学期の始業式の日、一回り大きくなった6匹のカメは無事教室に戻ってきたのである。子どもと一緒に届けに来てくださった保護者から「みんなから預かった大切なカメだと、一日も欠かさず世話をした」という話が担任を通して全員に伝えられた。子どもたちは2人の功労に感謝し、担任からは感謝状が手渡された。

冬が近づくと、カメたちの動きが徐々に緩慢になり始めた。水温が下がり、カメたちが冬眠の準備をし始めたことを、すでに何度も調べ学習を進めていた子どもたちは即座に気づく。ところが「冬眠を始めたら、

生きているのか、死んでしまったのか、わからなくなってしまう。」「動かないカメを見ているのは心配だ。」というのである。自然の摂理に任せるのであれば、そのままにしておくべきであろうが、その頃には、全てのカメに名前が付き、ほぼ全員が一目見ただけで、どのカメが誰なのかを見極められるまでになっていた子どもたちの思いも無下にできない。またまた、話し合いである。

大方の意見は、「いつも通り元気に動き回るカメと一緒にいたい。」にまとまり、そのためには水槽の水温を一定の温度に保つ必要があることだと、子どもたちが動き始める。教頭、理科主任の教員、学校の経理を担当する事務職員、日ごろお世話くださっている用務員まで必死に思いを伝え、方法を尋ねまわる子どもたち。水槽用のヒーターを手に入れたときの子どもたちの安堵の表情は印象的であった。



ただし、1台しかなかったため、昼間は日当たりのよい窓際に水槽を置き、気温の低い日や夜間はヒーターが設置された通称「カメホテル」に移動させて冬越しをすることとなったのである。

自分と動物を同一化して考える子どもたちの話し合いは実に感情的で、情感的である。「～してあげないとかわいそうだ。」「ちゃんと世話をしないと顔を覚えてくれない。」「えさをあげすぎてお腹を壊したかもしれない。」「寒くて風邪をひいたらどうすればいいのか。」「子どもたちは真剣そのものである。「カメ吉は女の子が好きなんや。〇ちゃんが近づくと、嬉しそうに寄ってくる。」「よく世話をする〇ちゃんの顔を覚えていて餌をあげると笑うんや。」真実がどうであろうと子どもたちは自分たちが懸命に関わることで、その思いに応じてくれる何かがあることにしっかりと気づき、最初の約束通り、世話をし続けている自分自身の存在を肯定的にとらえられるようになるのである。

単なる約束や決まり事ではない、自分たち自身で考え、相談し、導き出した結果をみんなで支持し、一つのことを成し遂げようとする力が、繰り返しの話し合いで見事に育っていった。これこそ、学びの力の芽生えである。活動を下支えする時間をいかに保証し、適時設定するかは授業の展開を大きく左右する。

4. 授業力④～教師の人間力と探究心～

これまでの子どもらの姿は、決して自然発生的なものばかりではなく、1年を通して途切れることなく継続させることは難しい事である。元来、子どもは残酷で気まぐれであり、動物の飼育で課題になるのが、生き物を「おもちゃ化」つまり、遊びの道具化してしまうことである。

これまでの例を見ていると、その傾向は教師の生き物への関心の度合いによるところが大きい傾向があるように思われる。実は、今回の授業を行った担任は、極めて動物が苦手で、カメを飼うという決断もよほどの覚悟を要したようである。出来れば、早々に子どもたちが飽きて、手放してくれないかとまで思ったという。当初は、臭いや汚れを最小限に抑えたくて学習環境づくりを苦心し、当番活動もどうすれば徹底できるのかと、その方向付けを思案していた。どちらかといえば、しばらく飼って終結できればともくろんでいたという。

ところが、飼い始めて間もない頃、担任の思いを大きく変化させることになる出来事があったことが学級通信に残っている。

連れて帰ったカメを本当に大切に愛情込めて世話をする子どもたち。朝から、水を替えたり、えさを調べたり、石を拾ってきて住処を作ったりと一生懸命。

ところが、6匹いるはずのカメが4匹しかいない！みんなのカメだと確かめ合い、決して持ち帰ったりしないと約束したはず。なぜ？

実は、どうしても手放せなくて持って帰った子どもが2人いたのです。気持ちは分かる、でもみんなの約束。

どこかに逃げたのかもしれないと懸命に探し回る仲間を横目に、いつもと違うそわそわしている1人の子。「何かあった？」そっと、声をかけ、黙って待ちます、時間をかけて。そのうち、「みんなにごめんなさいを伝えたい。」と一言。全てを察し、「そう。いいよ。」とだけ言って、いつどんな方法で伝えるのかまで触れずにいることに。

見つからないまま次の授業を始めようとすると同時に、その子が立ち上がり、嘘をついてしまったこと、約束を破って申し訳ないと言う気持ちでいっぱいだと言うことを一言一言確かめながら伝えたのです。緊張で脚をガクガクと震わせながら。

それを聞いた子どもたちから帰ってきた言葉は・・・

「いいよ。明日持ってきてな。」「また、一緒にお世話しよう。」と温かい言葉。ほっとしたように「みんな、ありがとう。」ようやくその子に笑顔が戻る。

ところが、話はそこでは終わらない。もう一人持ち帰った子がいたのだ。いつもやんちゃなA君。言いそびれてしまった上に、どうしていいか分からず、元気もなく、授業も上の空。どう見てもいつもとは違った様子に、回りの子どもたちも既に気づいているのだが、何も言わずそっとしたまま。すると、いたたまれなくなったのか、ある子が「どうしたん？大丈夫？」と声をかけると、ポロポロと涙があふれ、ただただ声を出して泣き出すA君。

その後、A君も黙って家に持ち帰っていたことが判明するのですが、そのことを聞いて子どもたちが発した

「だれだって失敗するよ。大丈夫。」「きつと言いたくても言えなかったんやろ。」「おれら仲間やから気にしなくていい。」「もう絶対持って帰らないって信じてる。」「これから頑張って大きく育てよう。」「明日は元気で学校に来てな。」
それを見ていた私は、涙をこらえることができませんでした。

(学級通信17号 2015. 5. 21より一部抜粋)

こうした一連の出来事について保護者にあてた通信の最後をこう結んでいる。「正直に話すこと 素直に気持ちを伝えること 仲間を思いやり 仲間のために働くこと 温かい心で仲間を認め 許し信じてること」2の1の子どもたちに生きる上で大切なことを教わった気がします。

担任はこのことを契機に、子どもたちとともに6匹のカメを育てきろうと決意したという。そして、カメの飼育に関する様々な知識や情報の収集が始まる。子どもたちに何を聞かれてもいいように、子どもたちが判断する上で的確な支援ができるように。



すなわち、子どもたち自身が考え、判断し、実行していると体感できる学習過程を仕組むための準備である。学校にある飼育に必要な道具の確認、新たに準備しなくてはならないものの予算確保、カメを飼育するうえでの注意事項、他学年への協力依頼、保護者への情報発信・・・

こうした担任の姿そのものが、子どもの学習への安心感となり、活力となると考えられる。「自分たちが一生けん命になれば、自分たちの先生は必ず応えてくれる」という絶対的な信頼感は学級経営の最大の基盤であり、教師の持つ人間力から派生するものと確信する。当然のことながら、生活科のみならず教科指導にもその勢いは影響を及ぼす。生活科学習は低学年において最も核となる教科であるとも言える。

実際、その後の子どもたちのカメに対する関わりは慈愛に満ちたものであった。必要以上に触れずにそっと見守り、その動きに意味があるのではないかと疑問も持ち、すくい上げては重さの変化を感じて、体重を量って記録しようと提案し、自分たちのカメの自慢を語り、休み時間を返上して水槽の水替えを行う。もちろん、手洗い、消毒も忘れず・・・

生活科の時間には、その成長の様子を観察し、自分たちの関わりを確かめ、できていないところを改善しようと試みた。最初は、怖くて甲羅に触れることすらできなかった子どもも、誰に尋ねられても即座にカメの特徴や様子が説明できるようになっていた。



**ぼくたち
わたしたちが
たんとうです!!**

かめのしょうかい

カメの名前 | _____ |
 カメの♀の大きさ | _____ cm |
 カメの♀の体じょう | _____ 756g |
 カメのとくぞ | _____ |
 カメのとくちょう | _____ |

こうした飼育活動によって、子どもたちの情操は豊かになり、同時に気づきの質の高まりも確実に見られた。

ほぼ、同時期に飼い始めた3匹のアメリカザリガニのうち2匹が6月末頃亡くなるということが起きた。緊急の生活科の時間は「ザリガニさんにできること」が学習課題となった。その中で、「なぜザリガニさんは天国にってしまったのかなあ。」というつぶやきがあり、子どもたちはあれこれと考えを出し合った。

「土日に世話をしあげられなかったから息が苦しくなったんだと思う。」「カメさんへの愛情が大きくて寂しかったんじゃないかなあ。本当に可愛がってあげられていたかなあ。」「脱皮した後の世話の仕方がよくなかったんだと思う。もっと別の場所においてあげなくてははいけなかった。」「水槽の洗いが雑だったかも。水の勢いが強過ぎて弱ってしまったたのかもしれない。」「外の世界なら自由に生きられるのに、食べ物も好きなものが食べられるし、疲れてしまったのかも。」「住処が狭すぎたんじゃないかなあ。」「餌をあげすぎたんだと思うよ。」「空気も入れ替えてあげたいし、ポンプもつけて育てたい。」

人工的な環境と自然界の違い、飼育することへの責任などしっかりと子どもたちは気づき、自分たちの行動を振り返り、今後に生かそうとしている。

その後、死んでしまったザリガニのお墓づくり班、手向ける花を摘む班、住処の改良班、看板作り班に分かれ作業が進み、新たに2匹のザリガニを加えて再度飼育がスタートした。

事に直面するたびに行う話し合いを成立させるため、当然策を講じなければならない。自分の意見を受容的に聞いてくれる集団であればあるほど、子どもたちは安心して自分の考えを堂々と発するようになるが、同時に自分の考えに反する意見については排斥しようとする。どの子も一生懸命、自分の正当性を主張しようとする姿は素晴らしく、この段階においては肯定的に受け止めてやることが重要である。しかし、そのまま成り行きに任せていると話し合いとして道筋が大きくそれていくことが往々にして起こり、この年代特有の感情論になり、大ゲンカにもなりかねない。その際、担任が大前提としたのが、2年生を終える3月のカメの姿である。そのとき、どんな姿でいてほしいのか・・・子どもたちの考えがそこに矛盾していないかを念頭におくことで、大きな混乱には至らない。

生活科における話し合いの利点は、そのほとんどがこれまでの生活や経験がベースになっており、正誤や善悪ではなく、多面性が受け入れられることにある。反面、その多様性から方向性を導き出していくのが教師の役割でもある。

日常的に子どもの動きや表情に目を配り、発する疑問やつぶやきを記録しては学習課題を設定し、導入に生かすなどを心掛けることで、いかにも子どもたちから生じた必然性のある学びとして成立する。加えて、子どもの発言を引出し、不十分な点は聞き返し、他の考えとつなぎ、相違点をまとめ、意見を分類したり、整理したりしながら明らかにしていく。そのために、板書が極めて重要である。

本実践においても、年度当初からどの教科においても、だれもがわかりやすい学習環境を整え、見通しの持てる学習展開を心掛けた事で、当初離席しがちだった子どもも落ち着いて学習に参加できるようになった。これを受け、生活科においても、板書の構造化に取り組んだ。指導のねらいのもと、学習のめあても子どもが発する言葉から生み出し、学習の時系列が一目でわかるよう提示した。更には、めあてに即した「本時のやくそく」を毎時間子どもとともに確認した。こうした積み上げで、子ども自身が願う学びが実現することを実感させることに至った。視覚優位の子どものにとって、耳から



入る情報は整理しにくく、自分の考えと同じなのかが判断つきにくかったり、今何を考えればいいのかわからなくなり、話し合いに参加しにくくなったりする。しかも、2年生の段階での板書は、図式化や色で分類化するなど、一目でわかる工夫が必要である。本時の学習のねらい（めあて）とその1時間のまとめを明確にすることで、子どもがしっかりと学びの振り返りができるよう配慮しなければならない。

こうした面でも、教師の授業力向上のために探究心を持ち続けなければならない。

5. 今後の課題

(1) いつまで飼育しつづけるか

こうして、このカメの飼育活動に関わる一連の学習は、生活科のみならず、他教科と絡みながら、学級経営そのものの中核となり、めざましい子どもたちの成長の姿を見ることとなった。

課題にぶつかるたびに、懸命に考え、話し合い、よりよい解決の道筋を自分たちで模索する姿である。当初「思いつき」の願いであったことが、確固たる「思い込み」に変わり、主体的かつ対話的に学習が展開し、個々の子どもたちの学習上、生活上そして精神的な自立の基礎が明確に見えたわけである。

しかしながら、現在、さらに大きな難題に面している。

3月までとスタートしたカメの飼育。実は1年で終結とはならなかったのである。思いのこもった時間の積み重ねにより、6匹のカメは学級にとってなくてはならない存在になっており、このまま飼いつづけたいという思いが日に日に大きくなり、何時間もの話し合いを重ね、3年生の間、自分たちで世話をし続けることとなったのである。当然、生活科学習は2年生で終わるため、カメの世話やそれに伴う話し合いは休み時間など授業時間以外でという事になるわけだが、結果、見事に子どもたちは飼育を継続し続けた。

さらには、飼育したものが、ミドリガメ（ミシシippアカミミガメ）であったということである。

ミシシippアカミミガメは、もともとはアメリカで生息するカメであり、寒さにも強く丈夫で飼いやすいカメであるため広くホームセンター等でも安価で販売され、人気も高い。ところが、みるみるうちに甲長30cmと大きすぎるサイズにまで成長し、寿命も約20～30年と長く、最後まで面倒を見るということには相当の覚悟が必要な生き物であることに後に気づき、逃げ出したり、捨てられたりすることで日本の生態系を破壊していることが問題になっており、実際、琵琶湖岸でも大量に姿を目にする。また、加えて、2020年を目処に特定外来種に指定し、輸入、販売、飼育にも規制がかかる方向に進んでいる。

実際、ほぼ2年間にわたり、大切に育ててきた6匹のカメたちは今なお、元気に生息しており、もうこれまでの水槽では入りきらないまでに大きく成長した。これまで長期間の休みには、代表の子どもが預かり、世話をするというのも難しくなり、子どもたち自身が「飼いたい」が「本当に最後まで買い続けることができるのか」と疑問と不安を持ち始めてきている。

小学校2年生という段階では、理解できなかった「自然界の生態系」という難題が目の前に立ちだかってきたのである。今となって、飼育開始時点で見えていた難題を指導者はどう解決するかという見通しが持っていたかが問われることとなる。

子どもたちは、単純に「元いた場所に返してあげる」と答えるだろう。しかし、琵琶湖の生態系を考えると、それは解決にはならない。

最善は、命が尽きるまで飼いつづけることであろうが、現実として可能なかどうか。まさしく次の段階の課題として、感情論ではない高学年としての学習が始まる訳である。今後の経過に注目したい。

(2) 新学習指導要領実施に向けて

2020年度実施に向け、中央教育審議会より「新学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」の答申が出された。

主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）や各校におけるカリキュラム・マネジメントという言葉が多方面で取り上げられ、学ぶことと社会とのつながりを意識し、「何を教えるか」という知識の質・量の改善に加え、「どのように学ぶか」という学びの質や深まりを重視することが必要とされ、学びの成果として「どのような力が身についたか」という視点が重要とされている。このことは4半世紀前に生活科が新設された当初より、生活科の核として充実が図られてきたであり、少しもぶれるところではない。

滋賀県生活科部会においては、『自立の基礎をはぐくむ生活科学習を求めて』を研究主題に授業実践、研究推進を重ね、2015年度には近畿地区生活科・総合的な学習研究協議会滋賀大会を開催し、『広がれ！子どもたちの心のフィールド～はじめよう！学んだことから身近から～』を大会主題に、子どもたちが生活科の学びを「自分事」としてとらえることの大切さと、そのための教師の「仕事」に焦点を当て、研究成果を公開した。まさしく教師の行うべき仕事により、子どもの学びはいかようにも変化することを目の当たりにし、今後一層、教師の行うべき仕事…授業力の向上を追求していかねばならないとさらに気持ちを引き締めている。

生活科の持ち味である教科横断的な視点での目標達成に向けたカリキュラムマネジメントのあり方や、今後一層、遊びや生活を通して学びの基礎が芽生える幼児期と、学ぶことに対して自覚が生まれる児童期との円滑な接続を図るスタートカリキュラムの中核となる教科としての研究実践を積み上げ、子どもたちの真の生きる力の育成に尽力していかねばならない。

内容(6)に関する指導事項

<小学校高学年>
第5学年では、メダカの飼育を通して、卵から小メダカになる様子を観察する。また、食べるものや、体の変化を調べ、魚の生態を知る。第6学年では、人やほかの動物が生きているために何を必要とし、体のつくりがどのようになっているのかを知る。

<4年生>
春夏秋冬の中で、どのように生きものの種類や暮らし方が変化するかを調べる。年間を通して、生きものの観察により、その成長や生態の変化を知る。

<3年生>
チョウを飼育する学習を通して、卵、幼虫、蛹、成虫への成長の変化を知る。また、成虫の体のつくりを調べ、同じ特徴をもつ虫のなかまの観察を行い、それらが、昆虫であると捉えることができるようにする。昆虫の住みかや、食べ物についても調べ、環境と関わって生きている事を捉える。

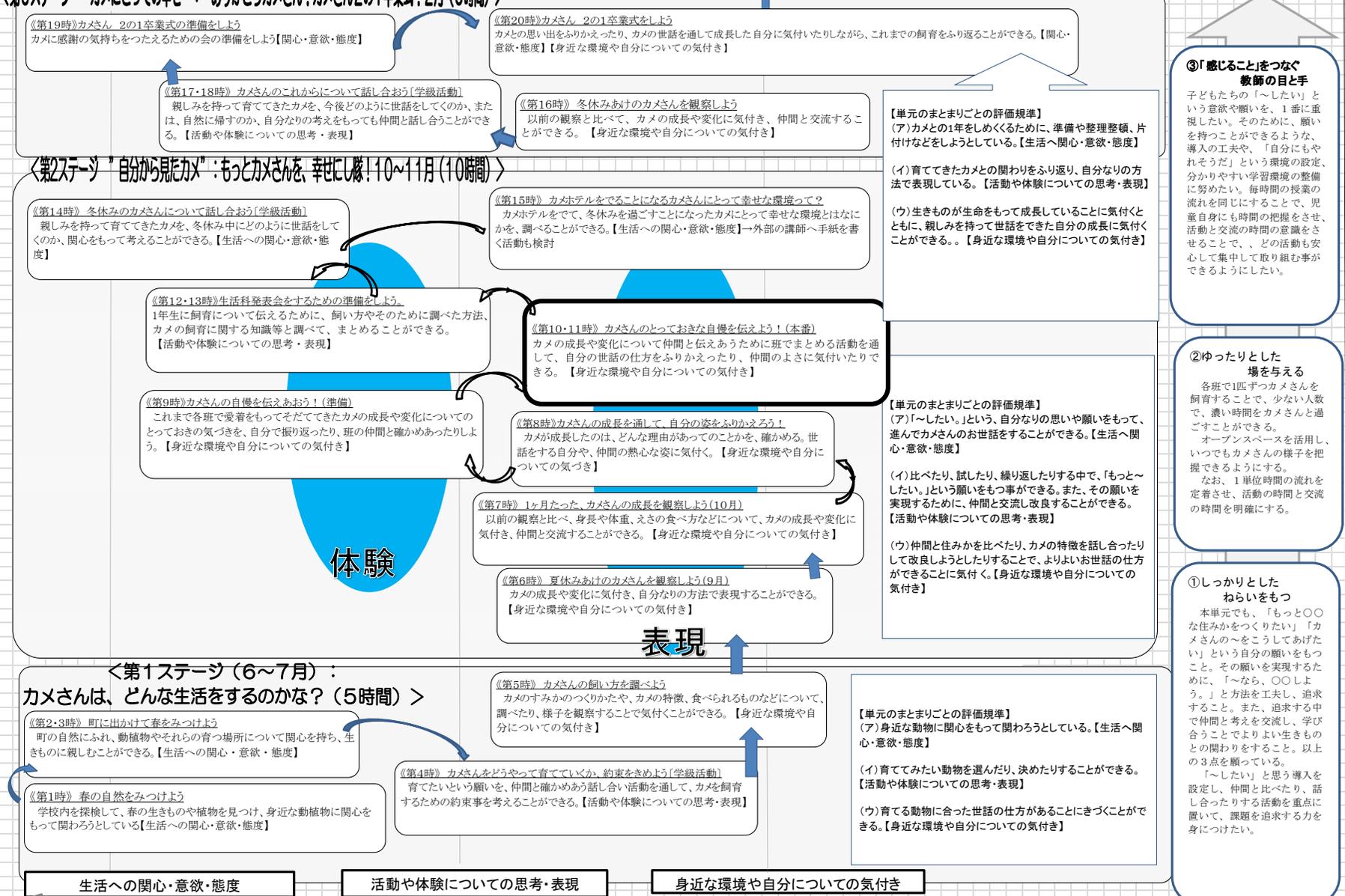
<2年生>
春の校外学習で見つけたカメの飼育を通して、餌の種類や、世話の仕方、住みかのつくり方、カメの成長の過程などを知る。また、親しみや愛情を持って飼育することで、動物も生命をもって生きていることや、自分との関わり方の気付きを感じる。学級会を通して、長期休業中の飼育方法や、日常生活での飼育に関する約束事も、児童の意欲や願いに応じて実施する。

<1年生>
秋みつけを通して、見つけた昆虫(バッタやコオロギなど)を飼育し、餌や環境を考えて、大切に育てる経験をする。幼稚園でも、自然の虫にふれあう機会があり、生きものに対する関心をもっている。

教材目標 継続的なカメの飼育を通して、それらに生命があることや、その変化や成長に気付き、親しみをもって世話をするのでできた自分の成長に気付くことができる。

評価規準 (ア) 飼育している動物に親しみを持ち、大切にしようという態度で、繰り返し関わろうと【生活科に求められる態度】
(イ) 動物の育つ場所、変化や成長について考え、世話の仕方を工夫している。【活動や体験についての思考・表現】
(ウ) 生きものが生命をもって成長していることに気付くとともに、親しみを持って世話のできた自分の成長に気付くことができる。【身近な環境や自分についての気付き】

1年間、大切にカメさんを育てることができたぞ！優しい気持ちでお世話ができたし、当番も忘れずにやることができた！がんばれたな！これからも、自分の仕事をきちんと果たしたり、仲間を大切にしたりしたいな。



③「感じることをつなぐ 教師の目と手」

子どもたちの「～したい」という意欲や願いを、1番に重視したい。そのために、願いを持つことができるような、導入の工夫や、「自分にもやれそうだな」という環境の設定、分かりやすい学習環境の整備に努めた。毎時間の授業の流れを同じにすることで、児童自身にも時間の把握をさせ、活動と交流の時間の意識をさせることで、どの活動も安心して集中して取り組む事ができるようにしたい。

②ゆったりとした場を与える

各班で1匹ずつカメさんを飼育することで、少ない人数で、濃い時間をカメさんと過ごすことができる。オープンスペースを活用し、いつでもカメさんの様子を把握できるようにする。なお、1単位時間の流れを定着させ、活動の時間と交流の時間を明確にする。

①しっかりとねらいをもつ

本単元でも、「もっと○○な住みかをつくりたい」「カメさんの～をこうしてあげたい」という自分の願いをもつこと。その願いを実現するために、「～なら、○○しよう。」と方法を工夫し、追求すること。また、追求する中で仲間と考えを交流し、学び合うことでよりよい生きものとの関わりをすること。以上の3点を願っている。

【単元のまとめごとの評価規準】
(ア)カメの1年をしめくくるために、準備や整理整頓、片付けなどをしようとしている。【生活へ関心・意欲・態度】

(イ)育ててきたカメとの関わりをふり返り、自分なりの方法で表現している。【活動や体験についての思考・表現】

(ウ)生きものが生命をもって成長していることに気付くとともに、親しみを持って世話のできた自分の成長に気付くことができる。【身近な環境や自分についての気付き】

【単元のまとめごとの評価規準】
(ア)「～したい。」という、自分なりの思いや願いをもって、進んでカメさんのお世話をする事ができる。【生活へ関心・意欲・態度】

(イ)比べたり、試したり、繰り返したりする中で、「もっと～したい。」という願いをもつ事ができる。また、その願いを実現するために、仲間と交流し改良することができる。【活動や体験についての思考・表現】

(ウ)仲間と住みかを比べたり、カメの特徴を話し合ったりして改良しようとしていたりすることで、よりよいお世話の仕方ができることに気付く。【身近な環境や自分についての気付き】

【単元のまとめごとの評価規準】
(ア)身近な動物に関心をもって関わろうとしている。【生活へ関心・意欲・態度】

(イ)育ててみたい動物を選んだり、決めたりすることができる。【活動や体験についての思考・表現】

(ウ)育てる動物に合った世話の仕方ができることに気づくことができる。【身近な環境や自分についての気付き】

担任の願う姿

「～なら、○○してみよう！」と自己の願いの実現に向け、仲間と共に、自分を高める姿